

はじめに

マハテイル・モハマド

日本には独自の強みがあり、地域の緊張や紛争、さらには戦争の可能性を高めるような特定の陣営に与^{くみ}するべきではありません。

『マハテイル 百年の思想 イスラーム、日本、脱植民地主義への道』の出版にあたり、久志本裕子氏ならびに集英社にお礼を申し上げます。私がイスラームに関連して執筆したものを翻訳し、日本の読者の皆様に届けようと尽力してくださったことに深く感謝しています。私がかねてより、日本の規律、社会秩序、そして公私を問わず理想とされる価値観を貫く人々の姿勢を、深い敬意を持って見てまいりました。

日本とイスラームの役割について論じるにあたり、私はひとりのムスリム（イスラーム教徒）として、イスラームが私の生き方に大きな影響を与えてきたことを強調しておきたいと思いま

す。イスラームは、単なる儀礼を定めた宗教ではなく、信仰と法、統治のあり方、倫理、そして個人としてのふるまい方を含む、包括的な生き方そのものです。

クルアーン（コーラン）の教えの根幹には、日々の行動や意思決定における指針となる教訓が示されています。私自身、かつてマレーシアの首相を務めていたときには、国家の開発を進めていくうえでクルアーンの教えを指針としていました。私は、その中でイスラームの理念が指導者としての役割と深く結び付いていることを学びました。イスラームは進歩を妨げるものではなく、むしろイスラームの価値観こそが進歩を促すのです。

イスラームは、規律正しき、誠実さ、長期的な視野、そして社会の利益となる発展への尽力といった価値観を大切にしています。これらの価値観は、私が公職に就いて以来、行政における指針となってきました。しかし残念なことに、今日の世界では、クルアーンに示されたイスラームの教えが軽視されることが多くなっています。なぜなら、社会の人々とその指導者たちが欲に駆られ、腐敗や不正を招き、その結果、正しい行いや良き統治が失われつつあるからです。

日本の読者の皆様にぜひお伝えしたいのは、皆様が大切にされている高潔な価値観のすべて

は、イスラームにおいても詳しく述べられているということです。一部のムスリムが宗教の定めるこれらの高潔な価値観をすべては実践しておらず、それがイスラームの評判を落としてしまっているのは大変遺憾なことです。イスラームの著名な学者であるムハンマド・アブドゥ（1849―1905）が述べたとされる次の言葉が、この問題の本質を捉えていると思います。

「私が西洋へ行くと、そこにはイスラームが見出されたが、ムスリムはいなかった。みいだ

東洋へ戻ると、そこにはムスリムはいるにもかかわらずイスラームはなかった」

（つまり、ムスリム自身よりも西洋の人々の方が真の意味でイスラームを実践できている）

日本と日本の人々は、調和、法と秩序の順守、勤勉さ、そして規律の重視といった高潔な価値観を大切にしていることで、世界的にも広く尊敬されています。イスラームの教えを深く掘り下げると、こうした日本の価値観は、信頼、誠実さ、責任感、正義、そして社会の平和の維持といったイスラームが重視する価値観と共鳴していることがわかります。

イスラームの核心にあるのは平和の理念です。「イスラーム」という言葉そのものが「平和」を意味しており、ムスリム同士が挨拶に使う「サラーム（イスラームと同じ語根の言葉）」という

言葉は、日常においても平和がとても重視されていることを表しています。イスラームは、人間関係において対立が起こり得ることを認めています。戦争を紛争解決の正当な手段とはみなしていません。戦争は、相互理解と正義の欠如を象徴するものです。戦争は回避されるべきであり、万が一発生した場合は、公平性、自制、そして和解を通じて終結させなければなりません。この教えは、日本がより平和主義的な立場をとる中で、戦争を永久に放棄することを定めた日本国憲法第9条と共鳴するものです。

しかし、今日の日本は、地域の大国間で高まりつつある緊張を背景に、自国の役割を模索して、内なる葛藤に直面しているように見えます。日本は、明確な立場を打ち出し、いかなる影響にも左右されないだけの勇氣を持たなければなりません。日本には独自の強みがあり、地域の緊張や紛争、さらには戦争の可能性を高めるような特定の陣営に与るべきではありません。今こそ、世界は戦争を犯罪とすべきときです。戦争から良いことは何も生まれません。戦争が紛争を解決する手段となったことは一度もありません。むしろ新たな紛争を招き、甚大な破壊をもたらし、莫大^{ばくだい}な資金を浪費し、何百万人も^{ばくだい}の命を奪い、財産を破壊するだけです。

本書が、私が理解し実践してきたところのイスラーム——すなわち、分裂の源ではなく、平

和、正義、そして人間の尊厳を重んじる信仰——に対する理解を深める一助となることを願っております。イスラームの理解へのささやかな貢献として、日本とイスラーム世界の人々が相互に尊重し合い、絆をより深めることに役立ちますよう。

2026年7月